

犬三態

宮本百合子

青空文庫

景清

この夏、弟の家へ遊びに行つて、いしたたみ 贅のようになっているところの籐椅子で涼もうとしていたら、細竹が繁り放題な庭の隅から、大きな茶色の犬が一匹首から荒縄の切れっぱしをたらしてそれを地べたへ引ずりながら、のそり、のそりと出て来た。ひどく人間を警戒していて、眼と体のあらゆる感覚を集めてあたりの空気に触れてみてから、脚をのそり、のそり運ばせて来る、そんな工合でだんだん此方へ近づいて来た。贅のところまで来ると、人間が用心して物を見る時のとおり眉根の辺を動かす表情で此方を見て、害心のないのを感じたらしくそこへ坐つた。それでもまだ視線は人間から決して離そうとしない。

この犬、どつかから逃げて来たんだつて。小さい男の子が、そんなことを云いながら、せんべを犬の方へ投げてやつた。歯音をカリカリ立ててすぐ喰べた。ひどくおなかすかしているの。というのは本当らしい。

人間が椅子の上でちよいと体を動かしても、三四間先の地べたにいるその犬はすぐ反応して神経を亢て、緊張した。犬はやがてその辺を、さつきあつちから出て来たとおりの人

間を意識した態度で少時歩いたが、元のところへ戻って来て再び腰をおろした。

暑い暮れ方の静かな庭の中で、その若くない犬の姿は心を惹きつけるものをもっていた。全身に力闘の疲労のあとが感じられ、人間一般を明らかに敵と感じている。

現在おかれている有様は受け身の警戒の形なのだが、その犬の心としては主張するところをもっていて、犬の身になってみれば何となしそれが尤もでありそうな、そういう表情が、毛のささくれた穢れた体に漲っている。敵意に充ちているけれども卑屈な表情はちつともないのである。

長いこと黙って整のところからその犬と向いあつて坐っている内に、芝居の景清を思い出した。自分から俺は悪七兵衛景清と名のつて、髪を乱して、妻子にわざとむごい言葉を与えて、自らを敵意のうちに破る景清の姿と、その若くない荒縄をひきずった犬の姿とは、何か印象のなかで通じるものをもっている。

おい、お前は景清のようだよ。知ってるかい。狂犬ではないのだ。何かやってひどくいじめられて、首輪のところからつながれていたのを必死に切つて逃げて来ているので、ずるずる地面を引ずる荒縄の先は藁のようにそそけ立ってしまったているのであった。

景清は、それからずっとその庭にいついた。日中は樹の間の奥にいつまでも寝そべって

いた。そこからは廊下や座敷で動いている人間のいろんな姿を見ることが出来た。余り人の行かない庭石のところに鉢を出して、飯をおいてある。

そのうち防空演習がはじまった。サイレンが何度も気味わるく太く長く空をふるわして鳴りわたる。

すると、一秒ほどおくれて、その犬がきつと遠吠えをはじめた。サイレンの音よりちよつと高いだけで、終るのも、終りに近づいて音程の下つてゆく調子も、そっくりそのままに連れて、朝でも、夜でもサイレンの鳴る毎に吠え、人間はサイレンばかりをきくのは又ちがった感情でその遠吠えを聴いているのであった。

いくらか犬の相貌がやわらいで秋が近づいた。今度は蚤を掻く音が高くきこえるようになった。見ているとそれほどでないのに、姿の見えない離れたところできくと、それは大きい凄じい掻き音である。それでもまだ人は近づけず、景清らしく秋の日に照されている。

黒子だらけの顔

いま住んでいる家で二階の南縁に立つと、幾重か屋根瓦の波の彼方に八年ばかり前にい

た家の屋根が見える。その家も南向きで、こちらも南がぁいてゐるから、ひよつとした折、元の家の二階の裏側の一部を眺める工合になつてゐる。そこには目じるしのように一本のヒマラヤ松が聳えてゐる。

その家に住む前には、同じ高台のつづきではあるがもつとずっと女子大よりの処に暮してゐたことがあつた。隣の奥さんが女のおくれ毛止めを發明したとかで、門には石柱が立つてゐるその家の庭の方では絶えずモーターの音がしてゐるし、エナメル匂いが苦しく流れて来た。

どの家へ移つた原因にも、みんな夫々の生活の時代が語られてゐるのだけれど、その老松町の家に暮した時分、忘られない犬のことがある。

音羽の通りへ出るに、大塚警察の横のひろい坂をよく通つた。もう十四五年にもなるから、代が變つてゐるかもしれないが、その坂の下り口の右側に、一軒門構えの家があつた。坂の中途の家というのは何となく陰気なものだ。そこも門から八ツ手などの植つた玄関までだらだら下りになつてゐて、横手に見える玄関の格子はいつもしまつてゐる。細長い踏み石がしいてあるその門と玄関との間のところに、犬小舎が置かれてゐて、そこに一匹の洋犬が鎖でつながれて暮してゐるのであつた。

毛並の房々したその犬は全身が白と黒とのぶちなのだが、そのぶちは胡麻塩というほど渋く落付いてもいず、さりとて白と黒の斑というほど若々しく快活でもなく、中途半端に細かくて、大きい耳を垂れ、おとなしい眼付で自身のそのようなぶちまだらをうすら悲しそうに臥て往来を見ている。

黒子の多い女の顔でもみるような、人間ばい生活の気分がその犬の表情にあるのであった。

秋雨の降っている或る日、足駄をはいてその時分はまだアスファルトになっていなかったその坂を下りて来た。悲しそうな犬の長吠えが聞えた。傘をあげて見たら、そこは、例のぶちまだらな犬のいる家の前で、啼いているのはほかならぬその犬なのだったが、何となし人の足を止まらせる姿でない。坂の方から門内へ流れる秋のつめたい雨水は、傾斜にしたがつて犬小舎の底をも洗い、敷き藁をじっとりぬらしている。

ぶちまだらの犬は首から鎖をたらしたまま、自分の小舎の屋根の上へ四つ足で不安な恰好に登って立っていて、その不安さがやりきれぬという啼きかたをしている。

往来の方へ、黒子の多い女の顔のようなその顔を向けて、啼いている。今のさつき啼きはじめてのではない啼きようだのに、家のなかはコトリとも物音をさせず、屋根の瓦も羽

目の色も雨に濡れそぼったまま二階の高窓はかたく閉っている。ぶちまだらの犬は雨で難渋しているというばかりではなく、その難渋のありようのうちに耐えがたい何かがあつて、それが啼かせるという風に、なきながら小舎の屋根の上で絶えず蹠あしうらをふみかえているのであつた。

佇んで傘の下から見えていたが、そんな玄関前の雰囲気で生活というものをやっている家の人々の気持も、受け身の形でそれをうつしているようなぶちまだらなその犬の佗しさも、その雨の中にある全体の有様は哀れさと腹立たしさとを交々に感じさせるのであつた。その日はそうやって通りすぎた。それからあと、雨が降る日には、道のそっち側へいつも傘を傾けるようにして足早に通つた。犬はずっと、雨が降りさえすると、やつぱりそこで小舎の屋根の上へ登つて、黒子だらけの女のような顔をこつちへ向けては啼いているのであつた。

朝のコリー

十年ぐらいの間に、その界限の様子は随分變つて來たのだが、特別この一、二年に新し

い屋敷がどんどん出来た。坪二百五十円であるとか、それではこの辺一帯の地価に対して高すぎる、だから売れない。そんな噂があつて、区画整理した分譲地もそここまばらに住む人が出来ただけで数年が経過していた。すると、一昨年あたりから、地価の方はどうなったのか知らないが、今まで草蓬々としていた四角や長方形やらの空地の上に、いろいろな形の家が、いずれもとおりいそいだ風にして建てられて行つた。分譲地の九分通りに、そうして家が出来た。

もとその一画は某という株屋がもっていた林や原っぱであつた。

子供の自分、××さんの原っぱの奥で、運動会があるというので見に行つた覚えがある。日向の芝生に赤い小旗がヒラヒラしていた。あそこへ××さんの唾の息子も来ている。そう云つて集つていた近所の人々は目ひき袖ひきした。

その家には三代唾のひとがいたとか、三人の男の子が唾だとか、それに何か金銭にながつた因縁話が絡んで、子供の心を気味わるく思わせる真偽明らかでない話が、その時分きかされていたのであつた。

今のこつているのは、原っぱの奥の崖下にあつた池のぐるりだけで、そこは分譲地にはならないから市の小公園になつた。崖下は住みでの種類がまるでちがつていて、崖下の家

々の男の子らはよろこんで、夏はタモをもつて来てその池のぐるりを駈けまわった。合ねむ歡き木がその崖に枝垂れて花咲いたりする眺めもある。

外国の住宅区域というところを歩くと、たとえ塀はどんなに高くても、そこに何か風流な工夫がほどこされてあつて、思いがけぬ透格子や鉄の唐草の間から、庭のたたずまいが見えたりして、一つの街の風景をまなしている。

その界限にこの頃たつ家は、いずれもぐるりをコンクリートの塀でひしかこつて、面白いこともなさそうに往来に向つて門扉も鎖してしまつてゐる。だが、昔ながらの木と土と紙でこしらえた家のまわりだけをそんないかめしいコンクリートでかこつてみるのはどういうのだろう、そこには奇妙な感じもある。

夏のある朝早く、やはりそういうコンクリート塀の横を歩いてゐた。その塀は長くてなかなかつきない、一丈もあるその塀よりもっと高く繁つてゐる樹木の枝が上から房々と垂れて、その片側もやはり塀であつた。細い一本の道がそこを通つて坂の下へと向つてゐる。その時刻、人どおりはちつともなかつた。青葉の陰翳が肩に落ちて来るようなしつとりしたその道を何心なく行くと、ひよつと白い大きいものの姿が見えておどろいた。極めて貴族的な純白のコリーが、独特にすらりと長い顔、その胴つき、しなやかな前脚の線をいつ

ばいにふみかけ、大きい塵芥箱ごみばこのふたをひっくりかえして、その中を漁っているのであつた。人気ない樹かげと長い塀との間の朝の地べたから巨大な白い髓が抽け出たような異様さで、その脚元にくさつたトマトの濃い赤さ、胡瓜の皮の青さ、噎えたものの匂いをちらばしている。

通りすぎようとする人影に、コリーは同じほどの高さでその顔を向けた。

細いニツケル鎖の首輪が光つた。そして、睫毛が長い、というような眼付で凝つところらを見ている。

すこし行つてもう一度ふりかえつたら、コリーはまだそこにいて、同じような姿勢のままこちらを凝つと見ているのであつた。

〔一九三九年十一月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七巻」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五巻」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「都新聞」

1939（昭和14）年10月30、31日、11月1日号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬三態

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>